

司法福祉学会が議論

日本司法福祉学会（会長 加藤幸雄・日本福祉大名誉教授）の第16回全国大会が8・9両日、都内で開かれ、これまでに最も多い約350人が参加した。大会テーマは「インクルージョンを促進する社会的条件」。罪を犯した人や非行少年が社会に戻るにはどのような



◀シンポジウムの模様

な支援の仕組みが必要かを話しあった。

初日のプレシンポジウムは、大会会場となった早稲田大の社会安全政策研究所が企画した。石川正興・同研究所長のあいさつに続き、犯罪・非行当事者3人が、それぞれ同じような境遇の人の立ち直り支援に当たっていることを報告した。

基調講演では、ソーシャル・インクルージョン（社会的包摂）を提唱してきた炭谷茂・恩賜財団済生会理事長が「現在の社会は意識的につながりを作らないと排除が生まれてしまう」と指摘。罪を犯した人が仕事や教育の場を通じて社会とかわりを持てるようにすべきだとした。

公園の清掃、古着ショップなどをビジネス的な手法で始めた例を挙げたほか、更生保護に地方自治体が協力することを更生保護法上の努力義務にすべきだと主張した。

シンポジウムでは松岡伸郎・福井県地域生活定着支援センター長（福井県済生会）が刑務所出所者のうち高齢・障害者を福祉施設などにつなぐ実践を報告。しかし、今年度から厚生労働省の補助金が減り、職員も2人減

ったことを明かした。この点について炭谷理事長は「現在の制度は不安定でまずい。職員が安心して働けない」と話

意識的につながり作ろう

し、同事業を所管する厚労省に苦言を呈した。この社会復帰支援にあたる東京地検の社会福祉士、松友了氏は「支援の場は疎外された特殊な場であってはならない。問

【プレシンポジウムの発言要旨】

一人では変われない



私は中学2年生で暴走族に入り2回少年院に入院した。逮捕歴は15回。現在は知的障害者のグループホームで管理責任者をしてい

る。交際中の女性が妊娠したと分かった24歳の時、このままの自分では子どもが不幸になると思い、故郷の広島から名古屋に移った。2014年3月にNPO法人を立ち上げ、少年院に面会に向いたり、出院した



私は22歳の時に逮捕され、更生を決意した。2008年から未成年専用の更生保護施設を運営し、現在は14

大人の責任は重い

歳から22歳まで20人の少年少女を預かっている。1年間真剣にかかわれば本人の問題を起さないと思われる価値観を変える自信があるが、女子は性的な問題を抱えている子が多く、なかなか簡単にはいかない。最近



私は刑務所に3回、通算20年入った。刑務所は健康者中心の世界で、知的障害者にはほとんど教育しない。弱い者を徹底的にいじ

人生は出会いで決まる

める所だ。しかし、私は聖書と出会い、マザー・テレサを知った。出所後の2012年4月、マザーハウスを設立し、現在は受刑者350人と文通したり、社会復帰した人30人超の生活を支援したりしている。活動